

Title	比較基準要素の概念拡張について
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2007, 41, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4068
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

比較基準要素の概念拡張について

岡田 禎之

0. はじめに

比較文における比較対象は並行的な要素でなければならない、とはよく言われる原則であり、そのことは以下のような事例に良く現れている。

- (1) a. The population of Japan is larger than that of Korea.
 b. *The population of Japan is larger than Korea.

「日本の人口」の比較対象として設定されるべきものは「韓国の人口」であって「韓国」そのものではありえない。それゆえ、(1b) のような表現は許されない、というものである。しかし、日本語では、廣瀬 (2006:41) にもあるように、このような「ずれ」は許容される。

- (2) 日本の人口は韓国 (の人口) より多い。

本稿は、(2) では「韓国」によって「韓国の人口」を表す「概念拡張」が生じているものと考え、何故このような違いが認められるのかについて、英語と日本語の比較を表す形態素の配置の違いと関連づけて考察していきたい。1) このような違いは、この2つの言語間にだけ認められるものではなく、類型論的な相違を反映しているのではないかとここでは考えてみる。そのためにいくつか他の言語からも同様のデータを提示しながら、話を進めていきたい。

1. 英語と日本語の比較基準表現の概念拡張

本稿では比較文として不等比較の場合を扱うことにしておく。Stassen (1985:24-26) にしたがって、不等比較には最低限3つの要素が存在すると考える。それは gradable predicative scale と2つの概念要素 (comparée と standard) である。ここではそれぞれ便宜上「比較特性」「主語」「比較基準」という呼び名を使っておく。そして、恐らくもっとも基本的な比較文形式と思われる、比較特性を表す要素がそのまま述語として利用されている場合を考察していくこととする。例えば、以下のような事例である。

- (3) John is taller than Bill.

John = 主語、tall (er) = 比較特性、Bill = 比較基準

ここでは以下の (4) から (7) に挙げたように、日本語と英語で比較基準要素の概念拡張可能性が異なる、という問題について考えてみることになる。

- (4) a. The freezing point of alcohol is lower than that of water.

b. *The freezing point of alcohol is lower than water.

- (5) a. アルコールの氷点は水の氷点より低い。

b. アルコールの氷点は水より低い。 (廣瀬 2005)

- (6) a. The students of A university are cleverer than those of B university.

b. *The students of A university are cleverer than B university.

- (7) a. A 大学の学生は B 大学の学生より優秀だ。

b. A 大学の学生は B 大学より優秀だ。 (廣瀬 2005)

- (8) a. 太郎は (次郎よりも) 背が高い。

b. Taro is taller (than Jiro).

まず日本語と英語では比較文形成のあり方に大きな違いが認められる。それは「比較文形成にとって必須となる形態素がどの要素に付随しているのか（より具体的には、比較基準なのか比較特性なのか）」という観点である。日本語の比較表現では比較基準に対して比較文であることを示すマーカーの「より」が直接ついているという特徴がある（8a）。この部分がなければ比較表現であることを示せず、単なる主語に関する叙述文になってしまうので、この部分が比較文形成にとって持つ意味的な重要性は高くなるはずである。

これに対して英語は（8b）のように、比較表現であることを示すマーカー（-er または more）は比較特性を表す形容詞、副詞に直接つけられる。これによって、than Jiro という比較基準の部分が存在しなくても、比較文であることを示すマーカーは存在しているので、比較表現形成は可能となる。すると比較基準部分が保持しうる意味的な重要性は相対的にかなり弱められると考えられる。省略されていても、比較文としての解釈はなんら支障なく得られるからである。つまり、この比較基準表現は「比較文形成にとって」付加的な要素であるとみなされる理由が充分にあるということである。このような機能しか担っていない対象物の概念内容を拡張解釈することは、日本語の場合に比べて難しくなったとしても不思議ではないであろう。より中心的な要素の意味解釈に注意が向けられ、適切な意味解釈を与えるために processing effort を費やすことはあっても、周辺的な要素の適切な解釈のために processing effort を費やすことは、合理的ではない作業と思われるからである。逆に、日本語では比較基準の部分は概念拡張をたやすく行える。比較文として成立するに当たって必要不可欠な基本的な重要な位置を占める要素であると認定できるからである。

このように比較文形成にとって必須の形態的マーキングが比較特性要素の形容詞に対して与えられるのか、そうではなく、比較基準要素に与えら

れるのか、という観点から分けてみると、日本語の場合の方が比較基準要素の概念拡張が容易に行えるということに一応の説明が与えられるのではないだろうか。

2. 他の英語型言語の場合

英語だけでなく、ドイツ語 (9), (10) やフランス語 (11), (12) のように、比較特性を表す形容詞に直接比較表現形成のための形態素が付加される言語では、比較基準表現を概念拡張することは難しく、英語と同様に代名詞もしくは前置詞を利用して並行的な関係を保持しなければならないようである。

- (9) a. Die Bevölkerung von Japan ist größer als die von Korea.
 b. *Die Bevölkerung von Japan ist größer als Korea.
- (10) a. Der Gefrierpunkt von Spiritus ist niedriger als von Wasser.
 b. *Der Gefrierpunkt von Spiritus ist niedriger als Wasser.
- (11) a. La population du Japon est plus grande que celle de la Corée.
 b. *La population du Japon est plus grande que la Corée.
- (12) a. Le point de congélation de l'alcool est inférieur à celui de l'eau.
 b. *Le point de congélation de l'alcool est inférieur à l'eau.

またロシア語 (13) も、他のヨーロッパ語族と同じく形容詞が形態的な変化を受けて屈折することにより比較級が形成されるが、予想通り、比較基準要素の概念拡張は不可能なようである。

- (13) a. Население Японии больше, чем население Кореи.
 "Population Japan-GEN larger than population Korea-GEN"

- b. *Население Японии больше, чем Корея/Корея.

“Population Japan-GEN larger than Korea-GEN/Korea”

他にもスペイン語 (14) , (15)、イタリア語 (16) , (17)、それから人工言語であるエスペラント語 (18) も同じ振る舞いを見せるようである。エスペラント語はポーランド出身のルドヴィコ・ザメンホフが1887年に発表した人工言語であるが、文法や語彙は基本的にヨーロッパの言語を基礎として作られている部分が多いため、似た振る舞いが認められるようである。

- (14) a. La población de Japón es más grande que la de Corea.

“The population of Japan is larger than that of Korea.”

- b. * La población de Japón es más grande que Corea.

- (15) a. El punto de congelación del alcohol es más bajo que el del agua.

“The freezing point of alcohol is lower than that of water”

- b. *El punto de congelación del alcohol es más bajo que el agua.

- (16) a. La popolazione del Giappone è più grande di quella della Corea.

- b. *La popolazione del Giappone è più grande della Corea.

- (17) a. Il punto di congelazione dell'alcool è più basso di quello dell'acqua.

- b. *Il punto di congelazione dell'alcool è più basso dell'acqua.

- (18) La Popolnombro de Tokio estas pli granda ol *(tiu de) Hiroŝimo.

“The population of Tokyo be-PRES more big than*(that of)

Hiroshima”

(藤巻 2001 : 147)

更に、ヨーロッパ言語であっても印欧系言語には属さないハンガリー語 (19) やアラビア語 (20) (これらの言語も比較形態素は比較特性を表す形

容詞述語に現れる)でも同様の観察は認められる。

- (19) a. Japán lakosság-a nagy-obb, mint Koreá-é.
 (Japan population-GEN big-COMPARA, than Korea-GEN+PRON)
- b. *Japán lakosság-a nagy-obb, mint Korea.
 (Japan population-GEN big-COMPARA, than Korea)
- (20) a. 'Adadu- ssukāni- l-yābāni 'aktharu min
 (Number-NOM the population Japan more from/than
 'adadi- ssukāni kūrīya.
 number-GEN the population Korea)
- b. *'Adadu -ssukāni-l-yābāni 'aktharu min kūrīya.

ところで、英語やロシア語では、than, чем という比較構造であることを示すためだけに用いられる特別なマーカーが比較基準に付随している。形容詞に対するマーキングのみならず、日本語と同じように比較基準にも比較文形成のための形態的マーキングが与えられているとも考えられる。しかし、これらの言語では、形容詞に対するマーキングが必須のものである、という点が日本語の場合とは異なっている。原級形容詞のままでは、than, чем を用いたとしても比較表現は形成できないのである。

- (21) a. *John is tall than Mary.
 b. *John высокий чем Mary. (=John is tall than Mary)

また他の言語においても同様の観察が可能であり、ドイツ語、スペイン語、イタリア語などでも形容詞に対する屈折、または形態素付加は比較文形成にとって必須である。

ちなみにロシア語では、чем を用いずに、比較対象を生格 (genitive) で表示することによっても比較文形成が可能となる場合 (22a) があるが、

いずれの場合においても比較文形成には、必ず形容詞を比較級にしなければならない、という制限がある。

- (22) a. 主格主語 + 形容詞比較級 + 生格 (比較基準)
 b. 主格主語 + 形容詞比較級 (複合形) + чем + 主格主語 (比較基準)

これに対して、日本語の場合でも、形容詞に対して「より」を付加することは可能であるが、しかしこれは強意的な表現であり、必ずしも必要なものではない。また形容詞に「より」を付加したとしても、比較基準を導入するに当たって「より」を省くことはできず、比較文形成のために必須なのは、比較基準要素を「より」によってマーキングすることである、と考えられる。前節の最後に述べたように、何が比較文形成にとって必須のマーキング方法であるのか、そのマーキングが比較特性を表す形容詞に対して与えられるのか、それとも比較基準要素に対して与えられるのか、という点で分類してみたいと考える。

3. 他の日本語型言語の場合

上に述べたようなヨーロッパ系を中心とした言語の振る舞いに対して、韓国語は日本語と同様「より」に相当する形態素 (pota) が、比較基準に直接つけられる形態をとり、形容詞は屈折しないので、比較基準の部分を取り去ると、比較文ではなく通常の叙述文になってしまう。ここでも、比較基準の概念拡張は比較的容易に行われるようである (23)。

- (23) a. Ilpon-uy inkwu-nun hankwuk (-uy inkwu) pota manhta.
 “Japan-GEN population-TOP Korea (-GEN population) than many”

- b. Alkohol-uy pingcem-un mwul (-uy pingcem) pota nacta.

“Alcohol-GEN freezing point-TOP water (-GEN freezing point)
than low”

また中国語 (24) の場合も、比較は介詞 (前置詞的要素) 「比」 + 比較基準要素の組み合わせで表され、比較対象の概念拡張が容易に行われうるようである。

- (24) a. 日本的人口比韩国(的)多。

“Japan-GEN Population than Korea (-GEN) large”

(The population of Japan is larger than Korea ('s).)

- b. 我的水平比他(的)差。 (小川 2000 : 121 を一部変更)

“I-GEN level than he (-GEN) lacking”

(My level is lower than he.)

(24b) の場合に代名詞が比較基準に用いられているが「他」はそれだけでは所有代名詞にはなれず、必ず「他的」のように「的」がなければ「彼らの」のように主要部が省略されていると解釈されることはない。よって、ここでは、概念的なずれが認められるということが観察できるのである。(24a) でも「的」はあってもなくても良いとの判断があるので、日本語や韓国語と同じタイプであることが分かる。

ただ、中国語が日本語や韓国語と異なっている点としては、比較基準表現の「比」 + 名詞の部分単純に削除することができない点が挙げられる。「我的水平差、(他的水平高)。(私のレベルは低く、彼のレベルは高い)では「私のレベルは低い」という文だけで独立文として成立する事はなく、必ず対比的な文脈が想定されるという事実がある。独立文として生じさせるためには、「我的水平很差。(私のレベルは(とても)低い)」のように

程度副詞を加える必要がある。この場合の程度副詞は特に程度の意味を明確には含まず文法的な要請により必要とされる形骸化された要素であるとされている (小川 2000 : 38 など)。

この様な相違点はあるけれども、それでも比較表現を形成する上で、介詞「比」+名詞の組み合わせが必要であり、比較文形成を担う最も重要な形態素である「比」が比較基準と組み合わせられて用いられる点は、日本語や韓国語と同列であるところでは考えておきたい。

ヒンディー語も同じ系列の言語である。比較形態素の *se* は比較基準要素と組み合わせられて登場するが、比較基準の主要部名詞の省略は認められるようである。

- (25) a. Japan ki jānsānkhya koriya ki jānsānkhya se zyada hai.
 “Japan-GEN population Korea-GEN population than large is”
 b. Japan ki jānsānkhya koriya se zyada hai.
 “Japan-GEN population Korea than large is”

次に挙げるのは、スワヒリ語の場合である。この言語でも、形容詞が屈折することはなく、比較基準の名詞に「より」を意味する *kuliko* を先行させる形で比較文が形成される。

- (26) a. Damu (ni) nzito kuliko maji.
 “Blood (copula) thick than water” (中島 2000 : 22)
 b. Idadi ya watu wa Japani ni kubwa kuliko ya Korea.
 “Number of people of Japan copula large than of Korea”
 b'. ?Idadi ya watu wa Japani ni kubwa kuliko Korea.

比較文形成のあり方は、日本語、韓国語、中国語、ヒンディー語と同列であるが、この言語でも比較対象間の概念的なずれは許容されやすいよう

である。(26b')のように、比較基準の前の *ya* は削除可能であり、*idadi* という主要部名詞の存在を直接想起させる統語的環境が必ずしも整っていない文章として成立するようである。

トルコ語の場合、形容詞に *daha* (more) を付けるか、もしくは比較基準を奪格で表示することで、比較文が形成されるという。“Degree of comparison is expressed by using *daha*=*more*, or by simply placing the noun which is compared in the ablative case.” (Mardin 1976 : 33)

確認してみると、*daha* は比較文形成には必須の要素ではなく、(3) に挙げた比較の3要素を含む文中であくまでも比較基準に対する奪格表示によって比較文が形成されるようであり (27)、日本語型に分類されると考えられる。事実、そのような振る舞いをこの言語は見せている (28)。

(27) Japonya'-nin nüfus-u Kore-nin nüfus-un-dan (*daha*) fazla.

“Japan-GEN population-3per/sing Korea-GEN population-GEN-ABL (more) large”

(28) a Japonya'-nin nüfus-u Kore-nin-ki-den (*daha*) fazla.

“Japan-GEN population-3per/sing Korea-GEN-Postposition-ABL (more) large”

b. ?Japonya'-nin nüfus-u Kore-den (*daha*) fazla.

“Japan-GEN population-3per/sing Korea-ABL (more) large”

(28a) では *ki* という後置詞が加えられているが、「人口」という名詞句に置き換わる働きを持ち、「韓国のよりも」に近いニュアンスを表すことができる表現であるとされている。しかし、このような形態をとらなくても (28b) にあるように、完全に「韓国」だけを比較対象要素として選択することも不可能ではないようである。

これまでの考察内容から、比較表現のあり方を見てみると、ヨーロッパ系を中心とする言語群では比較特性を表す形容詞に比較形成のマーカをつけることによって、主語要素を叙述する要素が比較情報を持つことになり、主語一者のみに着目する度合いが高く、この要素がどのような特性を持っているかを述べるという捉え方で比較構文が形成されていると考えられる。あくまでも主語中心性の度合いが高いということになるのではないだろうか。これに対して日本語、韓国語などは、主語要素だけを叙述する要素である形容詞に対してマーカが与えられるのではなく、比較基準に対してマーカが与えられることにより、主語要素と比較基準要素がともに重要性を持つ要素と認定される捉え方になる。いわば2つの比較対象を対等に扱い両方を見比べる、という捉え方である。この違いが、概念拡張の有無に結びついているのではないかとここでは考えてみたい。

このような考え方に対して一つのサポートとなる言語事実として、比較基準表現を倒置して文頭に出せるかどうか、ということが挙げられる。英語型では、比較基準表現を文頭位置に持ってくることはできないのに対して、日本語型では問題なく文頭に移動させることができる（中国語をのぞいて）。2) 比較基準要素を注目される場所に配置する表現形式が可能であるかどうか、ということ考えた場合、英語型では不可能なのである。

- (29) a. *Than Osaka, Tokyo is larger. (英語)
- b. *Als Maria, John ist größer / ist John größer. (ドイツ語)
- c. *Чем Osaka, Москва больше. (ロシア語)
- d. *Que la población de Corea, la (población) de Japón es más grande. (スペイン語)
- e. *Della popolazione della Corea, la popolazione del Giappone è più grande. (イタリア語)

- f. *Que Maria Jean est plus grande. (フランス語)
- g. *Mint Ószaka Tokió nagyobb. (ハンガリー語)
- h. *Minnī huwa atwalu. (アラビア語)
(than-I he-is taller)
- (30) a. 太郎より次郎が背が高い。 (日本語)
- b. Kunye pota, ku-ka khuta. (She than, he-NOM tall) (韓国語)
- c. *比韓国日本の人口多。 (中国語)
- d. Koriya (kī jānsānkhya) se, Japan kī jānsānkhya zyada hai. (ヒンディー語)
- e. Kuliko ku-ondoka ni afadhali tulale. (スワヒリ語)
(Than to-leave copula favored sleep-IMP)
"It is better to sleep than to leave."
- f. Kore-nin nūfus-un-dan Japonya'-nin nūfus-u (daha) fazla dir. (トルコ語)

4. 副詞句を用いた比較

これまでの考察に関連して興味深いのは、英語の場合であっても、日本語や韓国語と同じように比較文形成に必要な意味を担った形態素が、比較基準と直接組み合わされて登場してくる場合には、概念拡張は問題なく行われるということである。

- (31) a. Compared with (In comparison to) Japan, the population of Korea is small.
- b. Compared with (In comparison to) water, the freezing point of alcohol is low.

ここでは、主文の形容詞は原型のままであることを注意が必要である。

もちろん、形容詞を比較級にすることも可能であるが、これは redundant な表示である。BNC を調べたところ in comparison to (with) を含む 160 例文中、比較級、または最上級が用いられた用例 (redundant marking とされるもの) は 22、原級が用いられた事例は 98 (この中には、形容詞、副詞のみならず、程度を表すと思われる動詞や名詞を含んだ事例も存在している)、その他に、比較というよりむしろ対比的な表現として用いられていて、比較特性を含んだ表現が明示的に表れないものや、口語表現で言い間違えて使われていると思われるものなど、分類上当該の表現とは関係しないとされる事例が 40 あった。

さて、ここで重要なのは、このタイプの事例 (比較を表す in comparison to (with) の 120 例) からは、概念的なずれが許容されている場合が、8 例認められるということである。これに対して形容詞 -er + than の比較文形式を持つ用例からほぼ同数の比較対象間のずれを見つけ出そうとすると、1600 個 (つまり in comparison to (with) の総数の 10 倍のデータ) の抽出が必要であった (1600 例中 7 事例において概念的なずれが認められた。なお紙面の都合上具体例の提示は割愛する)。

実際の言語使用の場面においては、十分な文脈的な補足が与えられれば概念的なずれが無視されてしまうこともあり、比較表現において対象の並行性が常に厳密に守られているか、といえはそんなことはない。しかしそれでもこの種の事例を見ることは非常に稀であることが判明する。

以上のような議論および調査結果から、比較基準表現に比較を表す形態素が付けられた場合には、比較対象の概念上のずれが許容されやすくなるということが認められると思うのだが、これは英語に限られた話ではなく、2 節で挙げたすべての英語型言語に認められるようである。以下の事例はすべて、対応する 2 節における事例よりも容認度が高いという判断を一樣に与えられている。

- (32) a. Im Vergleich zu Japan ist die Bevölkerung von Korea klein(er).
 b. Im Vergleich zu Wasser ist der Gefrierpunkt von Spiritus
 niedrig(er). (ドイツ語)
- (33) a. Par rapport au Japon, la population de la Corée est petite.
 b. Par rapport à l'eau, le point de congélation de l'alcool est bas.
 (フランス語)
- (34) По сравнению с Японией население Кореи меньше.
 "In comparison with Japan-INST population Korea-GENsmaller"
 (ロシア語)
- (35) a. Comparada con Japón, la población de Corea es pequeña.
 b. Comparado con el agua, el punto de congelación del alcohol es
 bajo. (スペイン語)
- (36) ?Rispetto al Giappone, la popolazione della Corea è piccola.
 (イタリア語)
- (37) Japán-hoz képest Korea lakosság-a kis-ebb. (ハンガリー語)
 (Japan-to in-comparison Korea population-GEN small-er)
- (38) Bi-l-muqāranati ma'a-l-yābāni, 'adadu-ssukāni kūrīya 'aqaḷlu.
 (In-comparison with-Japan, number-the-population Korea smaller)
 (アラビア語)

5. まとめ

これまでの観察をまとめると、本稿での結論として、以下のようにまとめることが可能ではないだろうか。

- (39) 「比較基準要素に対して比較表現に必須の形態素が付随する場合、当該要素は概念拡張を生じやすくなり、比較特性を表す述語要素に問題の形態素が付随する場合には、比較基準要素は概念拡張を生じにくい。」³⁾

そしてこのような結論は、注目度の高い文内の中心的参与者である場合に概念拡張が認められやすく、周辺の参与者である場合には拡張対象になりにくい、というより広い一般的な傾向の比較構文における具現化であるということについても、また稿を改めて論じてみたいと考える。⁴⁾

謝辞:本稿の執筆に当たっては、神戸市外国語大学の立木 Donna 先生、D.Farah 先生、下地早智子先生、M. Sanz 先生、井上幸和先生、本学の鄭聖汝先生、林正則先生、和田章男先生、J. Nowakowitsch 先生、A. Disson 先生、堂山英次郎先生、森茂男先生、N.Y. Sultana 先生、竹村景子先生、A.R.Chuwa 先生、岡本真理先生、岡本久美子先生、岡山大学の栗林裕先生、ラトガース大学の I. Franko 女史を始めとして本当に多くの先生方からの貴重なご教示を得た。ここに記して感謝したい。

また本稿は、科学研究費（基盤研究(c)、課題番号 19520420）を受けての研究内容の一部である。

- 1) John is taller than six feet. や「ジョン（の背丈）は6フィートより高い（廣瀬 2006）」または「ジョンは（背丈が）6フィート以上ある」のように数量表現が比較基準に表れる場合、主語要素とは並行的な要素とは言えず、日本語で省略されている「背丈」のような関係概念に拡張して解釈する必要が生じる。この主語の概念拡張の問題についてはまた稿を改めて論じてみたい。
- 2) 前置を許さない介詞類は少ないようで、比較の「比」、受益者を導く「給」、変化対象を導く「把」、受け身の原因主を導く「被・叫・讓」などに限られる。これらは比較構文、受益文、把構文、受身文といった、かなり固定的な構文

の形式に組み込まれている点が共通しているようである（下地早智子先生のご指摘による）。

- 3) サンスクリット語やペルシャ語は、比較形態素を形容詞述語に直接付随させるが、比較基準要素の概念拡張は容易く行われるようで、ここでの一般化に反する事例となる。どのような要因が関与しているのかについては今後検討していきたいと考える。
- 4) この内容については、一部拙論岡田（2007）でも取り扱っている。

参考文献

- 安達太郎：「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』第9号
2001: 1-19.
- 藤巻謙一：『まるとエスペラント文法』東京：日本エスペラント学会，2001
- 廣瀬幸生：「日英語の比較構文：共通点と相違点をどう捉えるか」第73回待兼山ことばの会ハンドアウト，2005
- 廣瀬幸生：「比較の二つの類型：叙述型と領域型」2006. JELS 23: 41-50.
- 古賀勝郎：『ヒンディー語文法』大阪：大阪外国語大学，1972.
- Langacker, Ronald: *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol.1
Stanford: Stanford University Press. 1987.
- Mardin, Yusuf: *Colloquial Turkish*. Revised Edition. London:
Routledge & Kegan Paul. 1976.
- 守屋宏則：『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東京：東方書店，1995.
- 中島 久：『スワヒリ語文法』東京：大学書林，2000.
- 小川郁夫：『中国語文法・完成マニュアル』東京：白帝社，2000.
- 岡田禎之：「文内参加者の概念拡張可能性について」『ことばと視点』（阪大英文学会叢書4号），2007: 45-57.
- Stassen, Leon : *Comparison and Universal Grammar*. New York: Basil
Blackwell. 1985.
- 山梨正明：『認知文法論』東京：ひつじ書房，1995.

(文学研究科准教授)

SUMMARY

On the Conceptual Expansion of Comparative Standards

Sadayuki OKADA

Abstract:

Parallelism between targets in a comparative structure is sometimes violated, as in the case of standard expressions in Japanese which allow a conceptual expansion of their referents. In this paper, we would like to delve into the problem of how this conceptual expansion is licensed. In contrast to Japanese, the standard of comparison in English strictly adheres to the parallelism constraint, and other European languages follow suit. There seems to be a typological difference between the Japanese type (Korean, Chinese, Hindi, Swahili and Turkish) and the English type (European languages like German, French, Italian, Spanish, Russian, Hungarian and some others), and the key to the solution lies in the positioning of the mandatory morpheme designating the concept of comparison.

keywords : 概念拡張, 比較基準, 類型論の区分, 形態素配列